

新羅元暁の衆生済度

愛宕邦康

『三国遺事』「元暁不羈」には元暁（617—686）が「無碍」と名付けた瓢箪のお面を持って村々を歌舞して廻ったため、「皆が仏陀の号を識り、咸く南無の称を作す」ようになったと記されている。韓国の『国定韓国高等学校歴史教科書』を始め、日韓の多数の研究者がこれを「南無阿弥陀仏」の称名念仏と理解し、元暁を弥陀信仰を教化した先駆者であるかの如くに位置付けているのだが、そこに記されているのは飽く迄も「仏陀の号」と「南無の称」であり、決して「南無阿弥陀仏」に特定されているわけではない。諸学を融和させる和諍思想の提唱者である元暁が弥陀信仰に固執した事実はなく、著述にも一般名称としての仏菩薩を意識した「南無仏」の使用例は認められるが、「南無阿弥陀仏」の表現を用いたことは一度としてない。にも拘わらず、それが安易に「南無阿弥陀仏」と位置付けられたのは、やはり「浄土宗の意、もと凡夫の為にし、兼ねて聖人の為にす」の一文で知られる『遊心安楽道』が、元暁浄土教の主著とされていた日本仏教の影響であろう。

元暁は瑤石宮の寡公主と婚姻し、後の大儒薛稷を儲けた後、小姓居士と名乗って還俗している。ならば、元暁は還俗して何をしていたのだろうか。生涯に亘って様々な寺院を周遊し、諸経の研究を行っていたことは事実だが、筆者はその一方で緑衿誓幢の武官になったと見ている。元暁の百年忌に建立されたと推察される『誓幢和上塔碑』に、元暁が「誓幢和上」と尊称されている点、人物像として文武双方に秀でていたことを意味する「允文允武」の表現が用いられている点、碑文が音里火三千幢主を務めていた武官高金□によって作成されている点が根拠である。事実、『三国遺事』「太宗春秋公」には、唐竜朔二年（662）或いは唐総章元年（668）に新羅軍が唐軍と連合して高句麗へ侵攻する際、元暁が金庾信（595—673）の軍に従軍していたことが挙げられている。

はたして元暁が武官であるならば、その動向に関しても従来の認識とは全く異質の見方が可能になる。筆者はそのキーワードこそ、メシアニズムとしての弥勒下生信仰であり、その根底には絶対的な枠組みとして新羅という国家の存在があったと見ている。すなわち、元暁にとっての「衆生」の定義は、国王から一般民衆に至る全ての「新羅人」であるというのが筆者の見解である。

新羅には貴族子弟の精神の涵養と肉体の鍛錬を図り、国家の礎となる人材の育成を目的とする花郎という組織が存在する。これは弥勒の早期下生を説く疑経も含めたメシアニズムとしての弥勒下生信仰を根底とするものであり、花郎は下生した弥勒と位置付けられていた。末法到来の危機感が日本に弥陀信仰の隆盛をもたらしたのに対し、新羅にその傾向が希薄であったのは、弥勒下生信仰の浸透によって末法の危機感が解消されたためと捉えることもできる。また、『弥勒下生経』や『弥勒成仏経』には、弥勒はカースト第一位、僧侶階級に相当する婆羅門の息子として誕生するとされており、武烈王（在位 654—661）主導で進められた元暁の妻帯は、弥勒の新羅下生を視野に入れた国家プロジェクトであったと見ることもできる。

元暁は『弥勒上生経宗要』に疑経である『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』を引用し、弥勒の初会の説法で阿羅漢果を得る九十六億人は、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五戒を受持する者、二会の説法で阿羅漢果を得る九十四億人は、仏法僧の三宝に帰依する者、三会の説法で阿羅漢果を得る九十二億人は、一心に「南無仏」を称する者と位置付けている。民衆教化に歌舞を用いたのも、踊念仏などではなく、花郎の歌舞遊娯文化の点から検証されるべき事案であり、やはり元暁の口称念仏は極楽往生を欣求する「南無阿弥陀仏」ではなく、弥勒の最終法会の列席資格の条件となる「南無仏」であったと見る必要があるのではないだろうか。新羅の地がそのまま土地豊熟、人民熾盛たる理想の浄土と化す弥勒下生信仰の浸透は、元暁にとっても極めて重要な国家戦略だったのである。

（キーワード）元暁・弥勒信仰・新羅仏教・『誓幢和上塔碑』・『三国遺事』